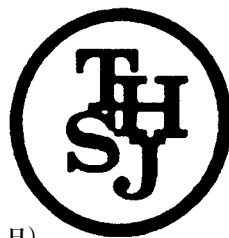


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第81号 (2017年4月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会
編集者 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号 名古屋学院大学 西村 美保



Liverpool 郊外の Sudley House からの眺め

(提供：西村美保)

ハーディとギリシャ神話の世界観

井上澄子

2017年1月、私は神戸市立博物館で開催中の「特別展古代ギリシャ」を鑑賞した。それは全325件、その9割以上が日本初公開で、前6800年以來エーゲ海に生まれた西洋文明の揺りかご時代の芸術品が時空を超えて登場し、原初的な“生み”の力を宿した神秘の造形を目の辺りにしていたく感動させられたのであった。

ハーディは21歳の頃、ドーセット州の建築家徒弟時代からギリシャ語とラテン語を学び、朝6時から8時までホメロスの『イリアス』や『アエネイス』またはギリシャ語新約聖書を夢中で読んだという。彼はその後昼間はずっとゴシック建築に携わり、夕刻ともなれば脇にフィドルを抱えて飛び出す。第一ヴァイオリンの父、チェリストの叔父とともに、村の婚礼やクリスマス・パーティーに出向いてはカントリー・ダンス、リール舞曲、ホーンパイプ舞曲を時には明け方まで

演奏するという驚異的な三重生活を過ごしていたという（『生涯』p.33）。

さて、ギリシャに話を戻すと、ハーディの作品には「ギリシャ神話」の神々や英雄たちがしばしば登場して彩りを添えていることの原因がここに理解できたのである。古代ギリシャ展は、ミノス文明、ミュケナイ文明、幾何学様式アルカイック時代、クラシック時代、古代オリンピック時代、マケドニア王国、ヘレニズムとローマと、区分毎に理解しやすく展示されている。

ハーディはいくつかの作品が完成すると、次の執筆までの間にエマを伴い、休養と次作の構想を練るためにグローバルに各地を旅行している。その行き先はオランダ、ベルギー、ライン地方に旅行してアントワープに滞在し、1882年と1888年にはフランス・パリに小遊し、巨匠たちの絵画芸術に触れている。また1887年のイタリア旅行では、トリノ、ジェノバ、ピサ、ローマ、フィレンツェで美術館や大聖堂を見学してイタリア・ルネサンスの人間性尊重の風土と時代精神に感銘を受け、ヴェネツィア派のティツィアーノと彼の影響を受けたイタリア帰りのフランドル派のルーベンスの絵画に心酔したことが記されている。ギリシャには行かなかったが、ハーディの「ギリシャ・ローマ神話」への関心は、『ダーバヴィル家のテス』にも次の様に表れている。

1) ルーベンス『ケルメッス（村祭り）』1630～35

ケルメッスとはフランドル地方独特の定期市なども立つ賑やかな村（教区）祭りのことであるが、『テス』では、チェイスバラの百合合亭で農民たちが週末に集まり、飲酒とジグ・パーティで歓楽を尽くす場面とよく似ている。祭という非日常的な空間のなかで社会的な道徳律や枠組から解放された農民たちのはじけるような生の讃歌であり、農民の体臭がむせかえるような猥雑な世界は、さながらオリュンポスの神々の酒宴である。「踊るカップルのおぼろげな群像は、ニンフ（妖精）を抱きしめるサチュロス（半獣神）か。多数のシュリンクスを引き回す牧羊神パンか、はたまた生殖神プリアポスから逃れようとして失敗ばかりしているロティスカ、と思われた」と描かれている。しかしやがて踊りを包んでいたもやが晴れると、すぐ近隣の素朴な農民たちの姿へと、イリュージョンから、リアリティの世界へと転換が行われる。

2) ティツィアーノ『エウロペの掠奪』（1559～62）

この絵画は「御猟場の森へのテスの略奪」の場面と呼応する。テスがチェイスバラからの帰りの夜道で「スピードの女王」のあだ名をもつ仲間のカー・ダーチの嫉妬をこめた怒りをかい、窮地に陥っているとき、夜の闇の中から馬に乗ったアレク・ダーバヴィルが現れて、危難のテスを救うかに見えて、馬の背にテスを飛び乗らせて駆け去る。御猟場の深い森の奥へと略奪されたテス（エウロペ）は、（ゼウス）ならぬアレクによって処女を喪失する。『エウロペの略奪』の主題は、オウィディウスの『変身物語』から翻案されている。テュロス王の娘エウロペに魅せられたゼウスが白い牡牛に変身して、侍女たちと海岸で遊んでいる彼女に近づき、安心したエウロペがその角を花輪で飾り、背中に乗ると、全速力で海を泳ぎ渡ってクレタ島に連れ去り、彼女と交わる。牡牛の背中中に取り乱すエウロペの官能的な肢体を画面に大きく描いている。

3) クリック親方一家の乳搾りの男女のバストラルの情景

午前3時頃の早朝、エンジェル・クレアにとってテスは、まだほんのかりそめの状況、陽気に楽しく日を送っていた。二人は朝の薄明の中、紫またはピンク色の曙光の中で顔を合わせた。霧の中で二人をつつむ異様な仄明るい暗闇に、彼は、キリスト復活の時刻を想った。彼女がマグダラのマリアかも知れないなどとは考えても見なかった。彼女のことを彼はからかい半分、アルテミスだの、デメテルだのといった現実離れした名前で呼んだが、彼女には意味が理解できない。アルテミスは純潔の処女神であり、デメテルは農業と穀物の女神であった。

4) ボッティチェリ『ヴィーナスの誕生』（1485～86）と『春』（1478）

ハーディはテスをボッティチェリのヴィーナス像に喩えている。すなわち「キュプロスの海か

ら生まれ出たようなテスの姿が突如祭壇に現れると、アレックの司祭の焰はかき消えてしまった」と描写するとき、ハーディの心象風景には、言うまでもなく、海の泡から生まれたというヴィーナスが貝に乗り、岸に吹き寄せられる優美な姿があったことだろう。中世では禁じられていた異教的主題を、ここに恋の女神としての官能性豊かなヴィーナス像として、テスの姿に重ねている。メディチ家の保護のもと、描かれたこの作品は『春』とともにボッティチェリの代表作として、イタリア・ルネサンスの栄光に包まれた芸術作品である。

ハーディがこれほどまでに神話を多用したことの解明には、ギリシャ神話の世界観の認識が大切となる。それはギリシャ的なものとしての牧畜関係の神話である。バスシバヤトロイの生活様式と世界、また『帰郷』のユースティシアとクリムの舞台となるエグドンの風土のもつ自然と密着した世界にも眼を向けて、ハーディの意図した高度なギリシャの思想や学問に思いを致すべきなのであろうとの感慨を私は抱いたのだった。

Wessex, Dorset and the Stellar Show: Hardy and Me Neil Addison

My interest in Thomas Hardy is connected to the fact that I grew up in a small corner of his Wessex; indeed, my home town of Poole, Dorset appears as Havenpool in Hardy's *The Mayor of Casterbridge*. Poole, with its large harbor, was the obvious choice for Hardy when choosing a port through which Richard Newson would return to England to seek Elizabeth Jane. Bournemouth, the nearest big coastal town to mine, where I spent much of my adolescence, is featured in *Tess of the d'Urbervilles* as a 'fashionable watering place.' My first memories of reading Hardy, however, are related to, perhaps inevitably, the theme of Egdon Heath.

As a youth I wandered across the heathland close to Bournemouth that was also viewed *in Tess* by Angel Clare; this was originally part of the vast historical heath that dominated the south of England and was named Egdon by Hardy. D.H. Lawrence identified Egdon as 'the deep, black source' of Hardy's pessimism, but my own experiences of heath-walking, even when visiting the heathland behind Hardy's Higher Bockhampton cottage, were of a different sort. For me it represented a source of freedom and inspiration that was engendered by its vastness. These sensations appeared validated as I read *The Return of the Native*, where Hardy described Egdon as below 'the sky [which] was as a tent which had the whole heath for its floor.' While Hardy also personified the heath dramatically as the 'cause of shaking dread', it should not be forgotten that in both youth and adulthood he loved to wander across it, and when one does likewise it is the former passage that seems geographically truest while the latter appears to come from Hardy's literary imagination. When we combine our reading of Hardy with a visit to Dorset we feel deeply the distinction between these sensations.

Exploring the county of Dorset, my experiences were informed by Hardy's creative imprimatur, yet while to traverse Dorset as a Hardian is to see it through the prism of his Wessex, one also sees his works in a different way when encountering his landscape. In

my case, I saw Hardy in a more positive light as I travelled across his Dorset, forming the opinion that while tragedy occurs frequently in his works, his more beautiful landscapes may often be chosen to subtly juxtapose sadness. Inspired by Hardy's prowess as a great cyclist, I often traversed his Dorset by bicycle, journeying to Wareham (Anglebury in *The Return of the Native*) where the winding river and rolling fields seemed an unlikely choice as the tragic location for Thomasin and Wildev's aborted wedding. Gold Hill at Shaftesbury, and the famous vista it commands across the Blackmore Vale, offered a needed lightness when reading the Shaston (the term Hardy used to refer to Shaftesbury) school episode in *Jude the Obscure*. In West Dorset the majestic views afforded by an 800 feet high hill (named Norcombe by Hardy) seemed to slightly ease the feeling of calamity evoked by the passage from *Far From The Madding Crowd* in which Gabriel Oak loses his sheep.

Virginia Woolf claimed Hardy's tragedy emanated from both his landscapes, such as 'The moors [which] are round us' and 'the stars [which] are above our heads', but I have always felt that neither is completely true. Indeed, it is upon Norcombe where my favourite, and indeed perhaps the most optimistic, Hardy passage on star-gazing occurs. In *Far from the Madding Crowd* Hardy's narrator describes a scene that transports the reader upwards into the heavens, gifting us a cognitive and transcendent shift in perception through a 'nocturnal reconnoiter' where 'the impression of riding along is vivid and abiding.' This is one of the most beautiful and affecting passages that Hardy wrote, and, while these sensations are simply and universally felt, they are no less memorable because of this.

From growing up in Hardy's Dorset to studying his works at Canterbury in rural Kent, I have always loved the simple sensation of star-gazing; finding a solitary nocturnal spot in which to place my 'singular corporeal human frame' within a humbling cosmic context. While thousands may flock to London to catch a glimpse of evening illuminations, the greatest stellar show that nature can bestow upon us plays nightly, and without cost. All one needs is a clear night sky, and rural Dorset, in Hardy's Wessex, still provides abundant opportunities to gaze upon this star-encrusted vista. As Hardy knew, and indeed as all Hardians know, when enjoying such sensations, one's earthly cares, and indeed life's tragedies, quickly melt away as we chart our 'stately progress through the stars.'

ハーディと私 その後

金子 幸男

文系学部不要との文科省からの発信があり、ノーベル賞学者が基礎研究軽視の理系の危うさについて発言をした。目先の利益にしか目がいかない世間の風潮が広がりを見せ、公的な高等教育機関の大学が危機に直面しているということであろう。しかし、私は公的制度にはあまり期待していない。法科大学院は失敗、英語で授業を行う学部は問題が多く、四期制も大学のブラック企業化をさらに進めるだけで不人気だ。

では、公的制度に代わるものとしては何があるのか。それは、任意団体ないし自発的結社

(voluntary association) といわれる、「国家や公的権力機関から独立した民間団体であり、外部の援助を仰ぐことはあるにしても、基本的にセルフ・メイドの組織」(小関隆の定義)である。イギリスでは18世紀には25,000あり、古事物愛好協会、芸術家協会、討論クラブ、政治団体、文芸協会、科学協会、狩猟クラブなど130種類はあったという。19世紀から20世紀への転換期に隆盛を見た。今なら学術団体、文化サークル、NPO、NGO等もその例であろう。ハーディ協会もしかり。もっともイギリスのハーディ協会は運営側の高齢化の問題から、1週間の大会プログラムを縮小する可能性があるが、昨年のドーチェスターの大会で報告があった。

趣味・娯楽関係以外では、チャリティ(フィランソロピ)(民間非営利の弱者救済行為)の中に自発的結社がある。金澤周作によれば、大別して個人の遺産を半永久的に運用する慈善信託(endowed charities)、会費を払い病氣や失業時の救済を受ける友愛組合(friendly society)、救済・教育目的等のために寄付金によって運営する篤志協会(voluntary society)などがあるが、篤志協会は自発的結社と言ってよい。イギリスでは18世紀後半から19世紀にかけてフィランソロピが盛んになったが、レッセ・フェールのもと、弱者を救済する公的行政がカバーできない部分はチャリティが補った。

こう見てくると、アソシエーションの文化が、イギリスでは、社会のセーフティネットや文化の旗振り役を果たしていることが分かる。振り返って、日本はお上に期待し過ぎて、この部分が弱いのではないかと感じる。実利中心主義の弊害は、公と私の間にある中間団体が充実していれば緩和されるはずなのだが、18世紀コーヒーハウスのような公共圏がより活発になればと思う。ブルームズベリー・グループやアフリカ文化に関心を示したアリス・グリーンサロンのような高度なものでなくともよい。

これから紹介したいと思うのは、任意団体というには短期的な研究集会の報告である。その誕生から終わりまでを見届ける機会を幸いにも私は得たので、記録に残す責任があると感じている。忘却の彼方に追いやってしまうわけにいかない。この研究集会では、批評理論の集中講義を公的制度の外、私塾のような形で行った。講師は、富山太佳夫先生。批評理論は一人で勉強するには難しく、かといって何もしないと理論性の高い論文が読めない。その難解な批評理論を19世紀から現代まで、英語の批評論文を読みながら、理論の概説もするという形で、ときには、具体的な作品の一節の理論的読解を試みる。一回4日間を朝10時から夕方6時まで行う。それを全9回行う。3月、夏休み、12月に設定され、1999年12月末に第一回が行われた。最後の第九回は2002年夏であった。扱った文芸批評家は、アーノルド、T.S.エリオット、ソシュール、バルト、エーコ、デリダ、ド・マン、ヒリス・ミラー、バフチン、フーコー、グリーンブラット、ジェイムスン、サイード、スピヴァックなど。構造主義、ポスト構造主義、ポストモダニズム、カルチュラル・スタディーズ、フェミニズム、新歴史主義、ポストコロニアリズムなどを扱った。富山先生は、無報酬、旅費と宿泊費は先生ご本人の負担、受け入れ側は夕食のみのおもてなしであった。参加者は50名~70名くらい、大阪市大、神戸大、大阪大の院生さんを中心に関学大他の大学の院生さんも東京を含めいくらか参加。また当時、大阪女子大の教員だった私を含め複数の関心ある教員が参加。関西支部ができていなかったときに、参加者が大学横断的な横のつながりを作れた意義は大きい。会場校の院生さんは論文のコピーと各大学の責任者への配布を担当し負担が重いので、多くの知り合いに声をかけるのは控えざるを得なかった。それでも50名は超えていた。上記三大学が中心になったのは、富山先生がその三大学で制度内の集中講義を行ったことによるが、外部にもオープンなその講義を聴講する機会を私は得た。神戸大学の集中講義の際、ある日の夕食時、あれは中華料理だったと思うが、私がある志を集めて批評理論の研究会でも立ちあげようかという話になったとき、富山先生が、自分が講義をして3合目まで同行しようと言ってくださり、こんなにいい話はなかったのでその好意に飛びついた次第。場所は大阪市大、大阪大

を借りて行い、それぞれ荒木映子先生、玉井暉先生にお世話になった。あれはきつかったが、本当に充実した時であった。富山先生は当時、東京でもボランティアで教えていたと聞いている。制度に縛られない動きをされたかったのかもしれない。

あれから早いもので15年。研究集会が終わった後、有志で関西批評理論研究会をたちあげて、この3月で34回を数えることになった。20名の参加者が、今では7、8名くらいになり、後どれだけ続くのか心もとないのであるが、それでも15年続いた（関心のある方は、ykaneko@seinan-gu.ac.jpまで）。私自身はいまだに理論は難しいとの感が強く、理論は平易な、なめらかな言葉で説明できないなら逆に読者を遠ざけ、文系力の低下に貢献することになると思っている。ともあれ、今、英文学会の中堅として活躍されている研究者の中にはあの研究集会に参加されていた方が少なからずいる。自発的結社である、ゆるやかな研究会、サークル活動が、文系軽視の風潮に対するささやかなレジスタンスになればと思う。

私にとって、「ハーディと私 その後」は、「イギリス的なもの」をテーマとして、ネーション、ジェンダー、階級、人種、エスニシティ等の批評のカテゴリーと歴史的な文脈に目配りしながら、言説の網の目からめとられた小説（ハーディを含む）を読んできた時期と言ってよい。

以上、富山先生は毀誉褒貶相半ばするほど大きな先生ではあるが、その一面が伝わったのではないと思う。こういうことを書くと、多くの方から先生ご自身もお嫌いな太鼓持ちと受け取られかねないのであるが、自分の寿命というものを5年、10年単位で眺めるような年齢になった今、制度の外で行われた批評理論の集中講義を記録することが、すべきことの優先順位の上位に位置していた。制度外の興味関心を同じくする者の集まりが生み出すエネルギーに大いに期待したい。

農民のテーマ

北 脇 徳 子

ウィリアム・ワーズワス（1770-1850）とサムエル・テイラー・コールリッジ（1772-1834）の *Lyrical Ballads*（1798）の刊行により、イギリス・ロマンティシズムが到来した。ワーズワスは、第二版（1880）の序文の中で、つつましい田舎の人たちの生活を題材に選び、日常の言葉を使うと宣言している。彼の詩に登場してくる名もなき人々の中には、年老いて病弱で貧しい猟犬係のサイモン・リー、肉体は衰えているが、その中に不屈の精神や忍耐力を持ち、堂々とした言葉を発する蛭取りの老人、息子に裏切られて苦悩する老いた牧夫マイケル、一人麦刈る乙女、ルーシーなどがいる。彼らは、孤独で、困窮していて、悲哀に満ちているが、威厳があり崇高である。

ワーズワスは詩の世界で、最も素朴な農村の人たちの中にある人間の威厳を歌ったが、フランス絵画のバルビゾン派の巨匠、ジャン＝フランソワ・ミレー（1814-1875）もまた、農民をテーマに多くの絵を描いた。ミレーは農民の息子であり、幼い頃から農場で働いた。両親が彼の絵の才能を見抜き、彼らの期待に応えるために、ミレーは農場を去り、画家になるための修行を積んだ。彼はブサンやミケランジェロの模写をするだけでなく、聖書やウエルギリウスの作品を読み、彼の生涯の絵画の基礎となる想像力を培った。

ケネス・クラーク（1903-1983）は、ミレーは政治的ではないと擁護している。彼はミレーの数々の名作の中でも、『晩鐘』、『落穂ひろい』、『種まく人』、『羊飼いの娘』、『くわを持つ男』な

どの最も有名な作品を取り上げて、こう述べている。「彼の労働者たちの我慢強い忍従と、彼らが物事の不変の秩序の一部であるという印象は、マルキシズムのそれとはまったく正反対のメッセージを表している」(‘Millet’ *The Romantic Rebellion* 1973)。過酷な労働と貧しい生活に疲れきった農民が大地に頭をたれて神に祈っている。彼らは自然の風景に溶け込み、静寂な一幅の画面の中に荘厳な姿で佇んでいる。「彼の自然と人間を効果的に配列するセンスは、雰囲気を持つ真理を見抜く驚くべき繊細な眼によって支えられている」(同書)と、ケネス・クラークは分析している。ミレーは、貧しい農民が農場で働く姿に、崇高な美を与えているのである。

ワーズワスとミレーが詩と絵画の世界で描いた農民を、トマス・ハーディは小説の世界に描いた。ハーディはワーズワスの詩を読んでいるが、ミレーの荘厳な農民の絵をどのように観ていたかは、私には全くわからない。ただ、ハーディの小説を読むたびに思い起こすのは、ワーズワスの詩であり、ミレーの絵なのである。

ハーディは、南イングランドのドーセット州の農村風景や農作業を多くの長編小説や短編小説の中で描いている。わけても『緑樹の陰で』、『はるか群衆を離れて』、『森林地の人びと』は、彼の三大牧歌小説である。『緑樹の陰で』において、彼は、生まれ故郷のハイアー・ボックハンプトンを舞台に繰り広げられる田園生活を描いている。『はるか群衆を離れて』では、ウェザベリーの農牧業を生業とする人たちの生活が描かれている。ヒロインであるバスシバ・エヴァディーンの最初の夫、フランシス・トロイが軍人であるという例外はあるが、彼は彼女と結婚して農場主になっており、この小説に登場してくる人物たちは、ほぼ全員が農牧業に従事している。『森林地の人びと』では、時代の変化の波が押し寄せてこない人里離れたリトル・ヒントックの森林地帯を背景に、林業に携わる人びとの営みが描かれる。

これら三作の中で、最も注目すべき朴訥な田舎人は、『はるか』のゲイブリエル・オウクと『森林地』のジャイルズ・ウィンターボーンであろう。オウクは農牧業に精通しており、有能な羊飼いであり、農場管理人である。バスシバに対する報われぬ愛を最後まで貫き、彼女の幸福のために、箴言することも厭わない。彼は、優れた農作業の技術と自然界の生き物の発する声を読み取る能力を持ち、バスシバの農場で働く人たちのリーダーとなって、彼女を支える。嵐の夜、轟く雷と稲妻の光の中で、懸命に麦におに覆いをかけるオウクとバスシバの姿は、この作品における最も印象深い場面である。自然の脅威に敢然と立ち向かうオウクは、おそらくハーディの理想の農民像であろう。

ウィンターボーンは植林とりんご酒造りに熟達した農民である。彼は自然と知的交流のできる人物であり、苗木を成長させる魔術師のような力を持っており、彼には森の木々と共感する感性がある。彼と彼の分身とも言えるマーティ・サウスが苗木を植えている姿は、まさにミレーの絵を想起させる。りんご酒造りに勤しむ彼は、「秋の兄弟」(『森林地』28章)だと描写されている。しかし、彼は貧しくとも力強く生きる農民ではない。ウィンターボーンは、家を失い、幼い頃から結婚するようになると言いつめられていたグレイス・メルベリーを妻にできず、最後に彼女の体面を重んじて、自らの命を落としてしまうのである。バスシバと結婚して、実質的に農場主となる勝ち組のオウクとは違い、ウィンターボーンはすべてを失って死んでいく負け組である。ウィンターボーンの死を森全体が悲しみ、マーティが彼の墓に花と鎮魂歌を捧げる。作者は、生きている間は幸薄かった彼の死を悼み、マーティの鎮魂歌を手向けることによって、彼の謙虚な生き様を称えているのである。

ハーディはオウクとは異なるタイプの農民、決して自ら積極的に求めず、忍従と貧困に甘んじるが、愛する人を守るために死んでいく人物を描いた。そのウィンターボーンもまた、ハーディの描く理想の農民なのである。彼の死を弔う森やマーティの姿は、ミレーの荘厳な農民に通じるものがあるように思われるのである。

第59回大会印象記

筒井 香代子

日本ハーディ協会第59回大会は、2016年11月5日（土）、金谷益道氏のお世話により、庶務委員長の渡千鶴子氏による総合司会のもと、同志社大学今出川キャンパス良心館RY303教室において開催された。まず同志社大学副学長の圓月勝博氏により開会の辞が述べられ、その後午前の部で4名の研究発表が行われた。

最初に、会長の新妻昭彦氏による司会のもと、今村紅子氏と坂田薫子氏の発表が行われた。今村氏は「悲恋のヒロインを見つめるハーディの語り手—『青い瞳』と「早咲きのスマレの花」」と題して、ハーディの語り手がエルフリードを取り巻く二人の男性、ステューヴンとナイトと、ヒロインの運命をいかに見つめ、語るかについて、作品冒頭のエピグラフ『ハムレット』第一幕三場「早咲きのスマレの花」の台詞を手掛かりにしながら『青い瞳』を再考された。エルフリードの過去の恋人でインドに行った婚約者ステューヴンと、知性派の新たな恋人ナイトとの三角関係は、エルフリードが「名無しの崖」でナイトの命を救った歓喜の瞬間に劇的な変化を見せる。感情が理性を凌駕してもたらされたヒロインの選択は、エルフリードをやがて破滅へと導くことになる。階級を超えた駆け落ちに躊躇し、過去の呪縛や裏切りに打ちのめされるヒロインは、次第に天真爛漫さを失い萎縮する。二人の男性を前に揺れ動くヒロインの姿を、単に軽薄で移り気な女性の悲恋であると片付けるのは早計である。生きることに真摯であり、因習に立ち向かいながらも打ちのめされる悲恋のヒロインの生き様を読み解く鍵が「早咲きのスマレの花」にあると結ばれた。

坂田氏は「トロイの矛盾—『はるか群衆を離れて』における表象としてのイギリス陸軍」と題し、ハーディが『はるか群衆を離れて』を執筆したヴィクトリア朝後期、人々の関心が陸軍の在り方に向けられていたことを踏まえ、彼がフランシス・トロイをイギリス陸軍正規軍の軍曹に設定した意味と、その効果と矛盾について考察された。まず、当時の士官批判と下士官兵批判を論じた上で、トロイが当時人々の非難の対象であった否定的な軍人を想起させる役割を担っていた可能性を探られた。次に、トロイは士官でも下士官兵でもなく、陸軍の改革論において理想の軍人像として語られるようになった下士官の最高位にいる軍曹という設定になっていることにより、陸軍の想起する、相反する二重の象徴を背負わされ、結果、彼の描写に大きな矛盾が生じている可能性を指摘された。そして最後に、こうしたトロイの二面性により、彼に係る他の登場人物のとらえ方や、作品のテーマそのものの理解にも幅が生まれる可能性を示唆された。

続いて、栗野修司氏が司会を務め、Neil Addison氏と押本年眞氏の研究発表が行われた。Addison氏は“Whom the Worm Now Knows” : The Dickensian Metropolis and Mortality in Hardy’s “A Wife in London” and “Drummer Hodge” と題して論じられた。ヴィクトリア朝時代のロンドンを、ハーディがどのように見ていたのかを考察し、さらに1901年刊行の詩集『過去と現在の詩』に収録された、ポーア戦争時の英国兵についての2篇を分析すれば、表面上悲観的な死についての彼の詩が、実は微妙に異なるコンテキストの中に位置づけられうる。またハーディのロンドン観を理解するには、ディケンズのそれをも分析する必要がある。ハーディが1862年から1867年まで、5年間ロンドンに滞在していたことを考えれば、ディケンズの見たロンドン

は、ハーディのそれとも重なるため、彼らの作品における文体上の微妙な類似は、それほど驚くことではないかもしれない。例えば、霧が生命を与えられて、敵対者になる『荒涼館』の有名な冒頭部分のように、ディケンズはロンドンを悪意のある主人公として描く。同様にハーディは、“A Wife in London”で、霧のかかった暗い都市のイメージを形成する。ディケンズはロンドンを有害な力として描写し、『荒涼館』に登場するロンドンの高利貸しであるジョシュア・スモールウィードは、不用心なものを餌食にしようと「巣をかける蜘蛛」として描かれる。ハーディもまた、幾重もの層になった蜘蛛の巣状の黄褐色の霧を吐いて、悲嘆している妻を捕らえる巨大なクモ形類動物としてロンドンを表す。“A Wife in London”と対をなすのが、より知られた“Drummer Hodge”である。これらの詩ではどちらも戦死した兵士の死が陰鬱なものとして提示されるが、前者は残された妻に、後者は兵士に焦点があてられている。ディケンズの描くような大都市ロンドンの闇に包まれた妻の暗澹たる運命と比べれば、両兵士の死にはまだ救いがあると結論づけられた。

押本氏は、「反戦詩人としてのトマス・ハーディ」と題して、ボーア戦争を扱った詩を主に考察された。ハーディの詩を読むと反戦詩人と呼んでいい側面に気づく。900篇を越す詩の中で目立って戦争を扱っているのは第二詩集『過去と現在の詩』に“War Poems”として収められた“Drummer Hodge”等ボーア戦争にかかわる11篇、第五詩集『映像の見える時』に“Poems of War and Patriotism”として収められた“Men Who March Away”等第一次大戦にかかわる17篇である。他にも第一詩集にはナポレオン戦争にかかわる詩が数編あり、第四、六、七詩集にも戦争に関する詩が見だされ第八詩集の“We Are Getting to the End”と続く。これらは数的にはハーディの詩の4%ほどであるが、*The Dynasts* との関連でも興味深く、一考する価値はあろう。英米では1940年夏にハーディ生誕100周年記念号の*The Southern Review*のW. H. Audenらの評論以来近年まで戦争詩を重視する批評の流れがあり、日本では森松健介氏がこれらの詩を重視されている。ハーディによる戦争詩の特徴として、1. ハーディ自身は戦場へは行っておらず主に想像力による詩であること 2. 登場人物は兵卒から伍長クラスが多く、皇帝、将軍の登場する*The Dynasts*とは大きく異なること 3. 戦死者、その亡霊がよく登場し、大英帝国の武勲を表す者はいないこと 4. 銃後の悲劇をよく扱っていること 5. 詩の形は比較的素朴であることが挙げられる。ハーディの戦争詩には、強い反戦意識があり、その意識を支える共通要素は、1. 他者、他の生き物に対する強い共感。特に苦しみに対する共感 2. ボーダーレス、民族、国境、国籍を超えての平和志向 3. 小さなイングランド志向。大英帝国拡大路線への疑問であると結論づけられた。

昼食をはさみ、午後の部は、事務局長の並木幸充氏の司会により総会が行われ、役員改選などが報告された。

その後、3人の講師により「土地と表象」と題されたシンポジウムが行われた。最初に河井純子氏が「ギヤスケル『北と南』の場合」と題して、自分の果たす役割を積極的に探し求めるヒロインである『北と南』のマーガレットが、暮らしの場を何度も変えることに注目された。牧師の娘という安定した立場を離れ、親しい者との別れを経験しつつ、彼女はつねに移動して行く。土地を移ることは、彼女の孤独を深め、心身に疲弊をもたらすが、同時に、正義を求める個人としての成長と自立を促す。それぞれの土地で進行する変化を目撃し、自らも痛みを伴う経験を重ねた結果、彼女は特定の場所への執着や嫌悪から解放され、土地や人間に対するバランスのとれた視点を獲得する。そして最終的に、彼女が居場所を求めるのはミルトン、すなわち社会の変化が肌で感じ取れる、流動性の高い土地である。都市のエネルギーが生み出す正と負の両面を学び、マーガレットは資本家としてそのシステムの一部となることを選ぶ。理想郷には程遠い、この北部の新興工業都市によって、作家はひとつの可能性—女性が、階級を超え、自立した個人と

して役割を求め、正義を貫くことのできる場—を示していると言えるかもしれないと結ばれた。

次に司会の風間末起子氏が「妖精Marty Southの住む森—移動の表象としての土地—」と題して、ハーディが『森に住む人々』においてマーティ・サウスを創造した意図は、土地の流動性と移動性を示唆することにあつたのではないのかとの賢察を出発点として、論を展開された。「女性の特質を無頓着に捨てたも同然に見える」マーティは、脱俗的であり、生身の人間というよりも、むしろシェイクスピアの『真夏の夜の夢』に登場し、その行動が思わぬ結果を招く妖精パックを思わせる。またマーティはグレイスと表裏一体をなしており、フェリスもまたマーティの分身であるといったように、これらの3人の女性の間には、分身的な移動と補完性が見られる。さらにマーティには、切断のイメージがつきまとい、自然と同化する彼女が、安定性揺らぐ共同体ヒントックに住み続ける代わりに、グレイスを外に出すことになる。作品において心理描写がほとんど見られないマーティは、寓意的かつ捉えどころのない存在であり、こうした土地の持つ不安定さを表象する役割を担っているとして「移動の表象としての土地」を例証された。

次に湯山健一氏が、「ハーディは何を聴いたのか」と題し、1830年前後にドーチェスター—円で活躍していたと言われるScorpion Bandなどの紹介も交えつつ、当時の民衆の音楽 (folk music) というものをハーディがどのように捉えていたのかについて論じられた。ハーディが幼少期を過ごした1840年代というのは、鉄道狂時代であり、人々の自由な移動を容易なものにした。Terry Eagleton は『緑樹の陰で』について、この作品名が巧みに都会に住む読者層に向けられたものであり、さらにその牧歌的な田園生活の描写は、自然とは働く場ではなく観賞すべき風景であるとする、これらの人々の考えを映し出すものとなっていると指摘しているが、鉄道の発達により週末に田舎を訪れるようなこれらの人々には、中流階級的立場 (positionality) が見られる。Michael Pollardによればハーディは、第一次フォークソング・リヴァイヴアルの中心的人物であるCecil Sharpたち同様、中産階級に属するものの、彼らとは異なり、内部の人間としてこれらの歌を聴いていたということであるが、ハーディを純然たる内部の人間とは言えないのではないか。ハーディの生きた時代は、フリー・リード楽器が庶民に普及したが、彼の作品においてフリー・リードへの言及は見あたらない。外からもたらされる新しい旋律だけでなく、新しい楽器の導入に伴う民衆音楽の変化をも当然の如く受け入れていたという点で、Sharpのようないわばrespectableな人々とは一線を画するハーディは、民衆音楽を娯楽と定義し、継続や変容、選択を経て楽しいものだけが残ると考えていた。一方で、R. Murray Schaferにより「耳の証人」と評されたハーディが、郷土の音風景 (sound scape) を描きながら、刻々と変わりゆく民衆音楽の響きを憂いの耳で捉えていたことも疑いようがないと結ばれた。

シンポジウムの後、深澤俊氏の司会のもと、「ハーディとともに五十年—近代文明の警鐘者として—」として題して、那須雅吾氏による特別講演が行われた。田園作家ハーディが抱いていた近代文明の急激な発展とその悪影響に対する危機感について、『帰郷』を中心に論を展開された。『帰郷』の冒頭の章では「文明はエグドン・ヒースの敵である」とある。つまりエグドンの住民たちの敵は「文明開化」そのものであると言える。それを裏付けるように主人公クリムが近代文明のメッカ、パリから文明社会の敗者として帰ってくる。そのクリムを筆頭にユーステイシア、ワイルディーヴ、ヨーブライト夫人などが文明開化の被害者であり、彼らには文明社会に横行している自己中心さと打算が見られるのである。

文明社会を象徴する最たるものは、結婚の破綻によりエグドンを飛び出し、絶望に打ちひしがれたユーステイシアの頭にあつたのが、夫のクリムではなく、「金」‘money’であったことである。これは「文明は、エグドン・ヒースの敵」との言葉を見事に裏付けるものとなっている。クリムも目を悪くするほど学問に勤しもうとも、それは人間性とは何ら関係のないものであるから、どれほど努力しようと意味のないものである。彼は都会の汚染からはなかなか抜け出すこと

ができないが、エグドンに戻り自然に触れたおかげか、最後には人間らしい姿を取り戻し、村人たちの良き助言者として巡回野外説教師の道を歩むことになる。しかし、このクリムよりもむしろ彼を救った紅殻屋のディゴリー・ヴェンにこそ着目すべきである。彼はこの土地が文明化や都会化するのを防ぐ、守り神とも言える存在なのだ。彼は紅殻屋という職業に就いていることと、幌馬車を持っていることにより、情報をいち早くつかみ、村人たちが困ったときには、いち早く駆け付けて、彼らを救うのである。最後にヴェンが裕福な農場主となり、村人たちから結婚を祝福されるというこの後日談は、実はハーディが意図的に加えたのではないだろうか。6篇4章の表題は「ブルームス・エンドに再び陽気さよみがえって」であり、やっと自然で平穏な春がエグドンにも戻ってきたことを物語っているからである。この作品は暗い夜に幌馬車を引くヴェンから始まり、明るい朝の立派な借り馬車に乗ったヴェンとトマシンに至るといった具合にハッピーエンドとなっており、そこにハーディの細かい配慮が感じられる。さらに、都会帰りのクリムではなく、表面上は目立たずとも昔からこの土地の人間で、周囲に気を配り土地を守ってきたヴェンこそが、真の主人公であると考えられる。そうすると、この『帰郷』という作品名も一考の余地があるのではないか。*The Return of the Native*を『帰郷』と訳して、そのような意味にとって果たして良いのだろうか。誰かが帰ってきたというよりもむしろ昔からこの土地に住みついていた村人たちが、復帰したと考えてはどうだろうかという問題提起をされた。

読み直すほどに明らかになる、近代文明の急激な発展とその悪影響に対する警鐘者としてのハーディを豊富な例でもって示された。最後に、因習や物質的野心にとりつかれている欧米の真似などせず、精神性豊かで輝かしい国となってほしいとする、当時の衆議院副議長に宛てたハーディによる書簡を紹介され、鹿鳴館時代に近代文明の道をひた走っていた日本に対しても、ハーディが警鐘を鳴らしていたことを明らかにされて講演を終わられた。

すべてのプログラムが終了し、新妻会長が閉会の辞を述べられた後、会場近くの御所西京都平安ホテルに会場を移し、懇親会が和やかに開かれた。このように充実した大会の運営にご尽力くださった同志社大学および協会事務局の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年会費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけると幸いです。なお、顧問の先生方は、一般会費のお支払いは不要です。

なお、会費を3年間滞納なさいますと、退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120-5-95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。よろしくをお願いいたします。

次回大会について（研究発表募集）

次回第60回大会は、今年の11月11日（土）に、上智大学（東京都千代田区紀尾井町7-1）にて開催されます。研究発表にご応募の方は4月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三つを、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、前会長の玉井暲先生です。演題は、現時点では未定ですが、ハーディ以外の文学や批評理論にもお詳しい玉井先生ですので、非常に興味深いご講演を拝聴できるものと楽しみにいたしております。シンポジウムは、不肖ですが、事務局の並木幸充が司会兼講師で準備させていただいております。主旨および概要はだいたい次のように予定しております。

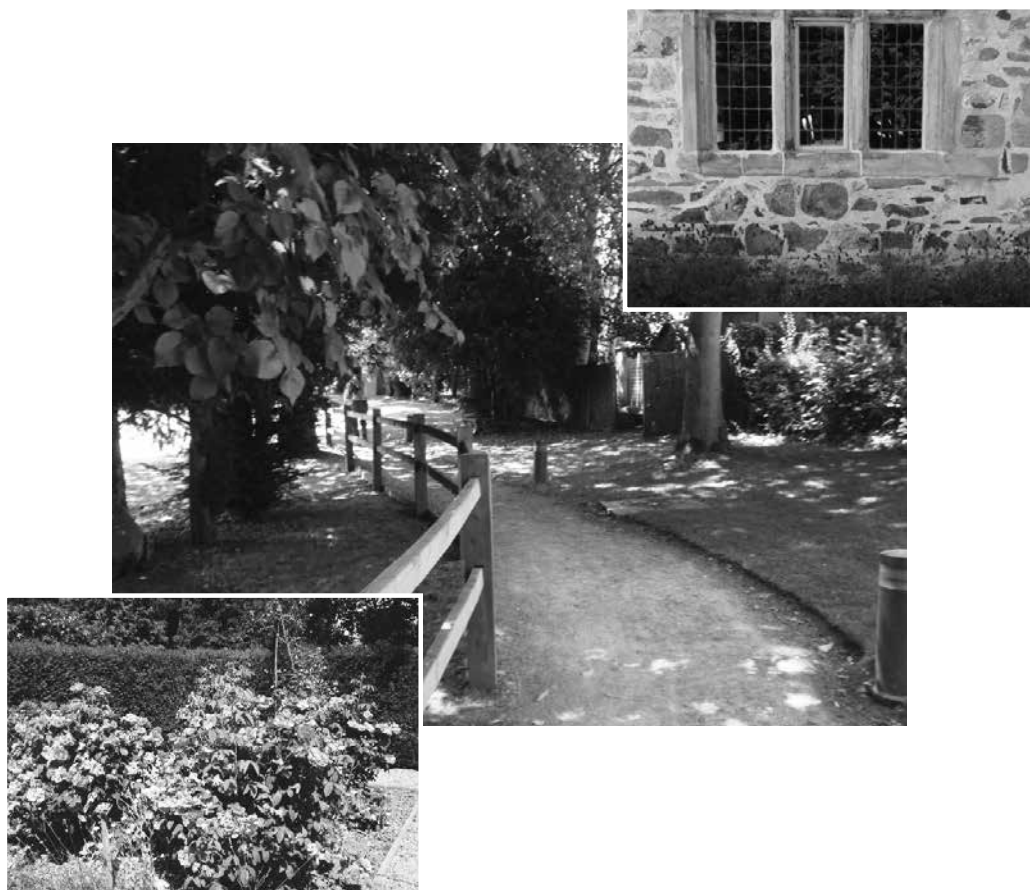
例年シンポジウムでは、特定の問題を絞って、学術的に完成度の高いご発表が多く行われています。もちろんそうした内容が大切であることは承知していますが、口頭で発表する場合は、もう少し思い切った議論が行われてもいいように思います。そこで今回は、「Thomas Hardy と同時代文学」という全体のテーマのもとで、押本年眞先生、塩谷清人先生、中谷久一先生に、そ

それぞれご自身の個別の問題をご提起、ご議論いただき、私たちの間だけではなく、会場にお集まりの皆様と、双方向的に意見の交換をしてみたいと考えております。従いまして、今回のシンポジウムの主役は、各講師の先生方のみならず、会場の皆様になろうかと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。司会を拝命した私は、力不足もあって、議論のまとめ役というより、事実上皆様のご高説を拝聴するだけになるのかもしれませんが。

《内外ニュース》

会員による研究書：

会員による研究書：福岡忠雄監修、北脇 徳子、渡 千鶴子、風間 末起子、坂田 薫子、菅田 浩一、杉村 醇子、高橋 路子、筒井 香代子、橋本 史帆、高橋 和子著（掲載順）
『「はるか群衆を離れて」についての10章』（音羽書房鶴見書店、2017年1月）



《ハーディに関する講演会》

2016年6月4日（土）に岐阜県立看護大学で開催された「日本ギヤスケル協会第28回例会」にて、金子幸男氏（西南学院大学教授）による「カントリーハウスにみるホームの変遷——ギヤスケル、ハーディ、フォースターとイングリッシュネス」と題する講演があった。

2016年12月3日（土）に武庫川女子大学（中央キャンパス）で開催された「日本ワイルド協会第41回大会」にて、金子幸男氏（西南学院大学教授）による「ハーディとワイルド——田舎、都会、イングリッシュネス」と題する講演があった。

2016年12月17日（土）に神戸市外国語大学で開催された「日本英文学会関西支部第11回大会」にて、粟野修司氏（佛光大学教授）による「ハーディとメソディズム——“Where novel-reading comes in, Bible-reading goes out.”——」と題する講演があった。

2017年1月28日（土）に関西大学（千里山キャンパス）総合図書館で、佐野晃氏（武蔵大学名誉教授）による「『熱のない人』 翻訳余滴」と題する講演会があった。

《編集後記》

表紙の写真はリバプール郊外に位置するヴィクトリア朝の商人の家、サドリーハウスの二階からの眺めです。外観は赤茶色の石造りの家で、優雅さも威圧感も感じさせない質実剛健な印象の建物ですが、中へ入ると、ラファエロ前派の絵画やターナーの絵画が飾られています。2015年から新潟、名古屋、東京で開催され、2016年春に山口県立美術館へ来た展覧会——「リバプール国立美術館所蔵 英国の夢 ラファエロ前派展」——で展示されていた絵画の中には、このサドリーハウス所蔵のものもありました。実はこの家は暖炉も印象的で、どれもモリスやラファエロ前派風の装飾的なタイルがあしらわれ、非常に美しいのです。この家の一人娘、エマ・ホルトは、1883年に両親とともにこの家に移り住んだ時、21歳でしたが、余生をここで過ごしました。エマはどんなことを考えてこの風景を眺めていたのでしょうか。健康福祉関係の慈善活動を活発に行い、1944年に亡くなると、この邸宅や敷地、所蔵絵画はリバプール市に譲られました。今ではフェンスの向こうに広がる公園からこの家の敷地へは自由に行き来できて、散歩する犬と飼い主のほほえましい姿を見ることもできます。

さて、今回も執筆者の皆さまには、年度末でお忙しい時期に、バラエティに富んだ非常に興味深い内容の原稿をお寄せ頂きまして、誠に有難うございました。転出のため、研究室は引っ越しの段ボール箱で一杯になり、荷造りをしながらの編集作業でした。執筆者の方々のご協力、中央大学生協印刷部の藤様のご尽力に、心からお礼申し上げます。次号は9月発行予定で、原稿締め切りは7月10日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。皆様、奮ってご寄稿ください。尚、ハーディに関する著書、翻訳は編集者までご連絡ください。お待ちしております。